

アイデンティティ政治と「政治的正しさ」

—競合のための差異—

一橋大学 兪羅珠

1. 目的

この報告の目的は、アイデンティティ政治の意義をその理論的・歴史的背景を通して明らかにし、アイデンティティ政治が今日、「政治的正しさ」、「PC」といった概念でどのように表象されているかを検討する。その上、アイデンティティの差異が力動的な競合と社会変革の手がかりになるように理論的想像を試みる。

2. 内容

① アイデンティティ政治の理論的・歴史的背景

二つの背景があげられる。第一、コミュニタリアニズムである。それは、自由主義と異なり、個人を社会的文脈から離れた原子論的個人ではなく、社会的文脈から切りはなすことができない社会的存在とみなす。たとえば、チャールズ・テイラーは個人の文化共同体（エスニシティ、人種的マイノリティ集団）への帰属を強調し、個人のアイデンティティは共同体との対話的關係を通して構築されるという。コミュニタリアニズムは自らを叙事的自我として定義するこのアイデンティティを重視する。第二、1960—70年代のアメリカの公民権運動である。ここで女性、有色人種、性的少数者たちは自らの権利を主張し、家父長制と人種差別、異性愛主義といった支配的規範に対抗した。また、自らのアイデンティティを支配的規範との差異として肯定的にとらえようとした。1990年代以降アメリカを中心に広がり、また批判されたPC概念とアイデンティティ政治には、これらの二つの背景があるといえる。

② 多文化主義、「政治的正しさ」、アイデンティティの表象

主に1980年代以降に加速した「グローバル化」により人々の移動が過去より大規模に起きた。多文化主義は、この背景の上で人種・民族的マイノリティを国民国家内に統合し、マジョリティとの緊張を和らげるために考案された政治理論上の概念である。英語圏地域だけでなく、東アジアでも一つの政治的プログラムとして行われている。日本では主に1990年代以降に「多文化共生」という用語が使われた。多文化主義は、社会ごとにコンテキストが異なるが、共通的にさまざまなマイノリティとマジョリティの水平的共存を強調し、マイノリティが置かれた非対称的位置は考慮しない。多文化主義の言説は少数者アイデンティティを「政治的正しさ」で擁護するが、多様性というレトリックのために並列的に並べるだけで、少数者が抱えている構造的問題は看過しやすい。PC概念は単に多様性のためのものではない。

③ 世界のための差異

PC概念は①でいったように、少数者アイデンティティが社会的文脈のなかで構築されること、またそれが支配的規範と多数派との差異を持つという認識である。それは、より多くの存在を現すことで現在の世界を再解釈することを可能にする。アイデンティティの差異をレトリックのためのものでなく、世界をより豊かにするための手がかりとしてとらえるならどうだろうか。